

体験的・ロマンス語学への手引

鈴木 覚

はじめにお断りしておくが、筆者はもともとフランス語学（とくに中世フランス語）を専攻するものであって、ロマンス諸語全般に関しては門外漢なのであるが、中世フランス語を研究するには、ロマンス諸語についても、ある程度の知識が不可欠であり、筆者が専攻領域を研究する過程で、必要に迫られてロマンス語学を学んで来た経験を顧みて、他の研究者にも参考となるように思われる点を少々綴ってみた次第である。

尚、ロマンス語学といっても、ここでは現代語の研究ではなく、中世語に力点を置いた歴史的な観点からのロマンス語学研究入門に話を限定し、その上、入門者向けということで、すぐに入手できる参考書だけを限定して挙げてある。従って今日では古典の名著となっている書名でも、up-to-date という考えから故意に省いてあるので、そのつもりで読んでいただきたい。

まず初めに接すべき入門のための入門書ともいうべきものとして、

Gerhard ROHLFS: Einführung in das Studium der romanischen
Philologie 2 vol. (Carl Winter Universitätsverlag,
Heidelberg, 1950-52)

を挙げておこう。

第1巻ではallgemeine Romanistik, französische & provenzalische Philologie の3章が論じられ、第2巻では、italienische Philologie に論が進み、そしてほんのつけたりではあるが、sardische & rätoromanische Sprache が扱われている。この2巻からはスペイン語、カタロニア語等については欠落しているが、同じ著者によって、

Manual de filología hispánica (Bogotá, 1957)

というのが出ているので、これで補って欲しい。

この3巻の書によって、中世語・文学から現代語・文学にいたる研究の現状、研究史、研究書、専門定期刊行物などについて詳しい知識が得られる。

これに近い入門書として他に

Jorgu JORDAN: An Introduction to Romance Linguistics, Its

Schools and Scholars, revised, translated and in parts
recast by John Orr (B. Blackwell, Oxford, 1969)

がある。

それからキリスト教文明に不案内な我々にとって懇切丁寧なのは、その方面について明解に説いてくれる、

Erich AUERBACH: Introduction aux études de philologie
romane (Vittorio Klostermann Verlag, Frankfurt, 1949)

が良いと思われるが、フランス語に力点がおかれ、他の言語については、やや断片的なきらいのある点が惜しまれる。これのイタリア語訳が最近廉価で入手出来るようになった。イタリアの G. Einaudi Editore から、Introduzione alla filologia romanza の書名で出ている。

これらの参考書で基礎的な知識を蓄えたら、

W. D. ELCOCK: The Romance Languages (Faber & Faber, London, 1960)

Carlo TAGLIAVINI: Le origini delle lingue neolatine, Introduzione alla filologia romanza (Bologna, 1959)

などによって、ロマンス語全般にわたる概観を得るとよいだろう。

そして、その後

Pierre BEC: Manuel pratique de philologie romane, 2 vol.

(Picard, Paris, 1970)

に当れば、より具体的な知識を得ることが出来る。この本は、中世ロマンス諸語のテキストを数篇選び出して、一語一語痒いところに手が届くように詳しく説明してくれる必読の書である。第1巻は italien, espagnol, portugais, occitan, catalan, gascon を、第2巻は français, roumain, sarde, rhéto-frioulan, franco-provençal, dalmate を扱い、巻末に総索引がついている(ルーマニア語など、いくつかの言語については中世以後のテキストもあげられている)。

Edouard BOURCIEZ: Eléments de linguistique romane, édition
revue par Jean Bourciez (Klincksieck, Paris, 1967)

は、ロマンス語学を研究する者なら誰でも一度は手にする有名な研究書で、これを読むのも有益なこととは勿論であるが、筆者は、上記 Bec 教授の本を読んで得た知識の整理用につかったらよいと考えている。同じような目的で重宝なものとして、文庫サイズの双書 <Sammlung Götschen> の中の

Heinrich LAUSBERG: Romanische Sprachwissenschaft, 4 vol.

(Walter de Gruyter & Co. 1963-67)

がある。但し、これは第3巻の第2部まで(第1巻 Einleitung und Vokalismus、第2巻 Konsonantismus、第3巻第1部・第2部 Formenlehre)しか出ていない上に、索引がなく、少々使いにくい点が惜しまれる。尚、同書のスペイン語訳 Lingüística románica 2 vol. (Editorial Gredos, Madrid. 1965-66) があり、第1巻 Fonética の方には索引がついているので、筆者としてはこれを入手されることをおすすめする。

Bourciez の上記の本と Lausberg の本とでは説明の展開の仕方が異っている。

個別言語ごとに知識を整理するには Bourciez の方が使いやすく、事項ごとに、例えば(俗)ラテン語で強勢をうけた開音節の \bar{a} は各言語において、どう進展したか等々を知るには Lausberg の方が便利である。

ロマンス諸語の成立について前に挙げた W. D. Elcock の著書以上に詳しく掘り下げたいと思うときは、

Walther von WARTBURG: Die Ausgliederung der romanischen Sprachräume (A. Francke, Berne, 1950)

を読みたい。これにはスペイン語訳とフランス語が出ているが、著者自ら原著改訂の手を入れたフランス語訳をすすめたい。Klincksieck (Paris) から La fragmentation linguistique de la Romania (1960) の書名で出ている。

ところで、中世ロマンス諸語を研究する際に忘れてならないのは、当時の精神生活に多大の役割を果たしていた中世ラテン語であって、ロマンス語学を研究するものは、この方面の研究も怠ってはならない。入門書として、Dag NORBERG: Manuel pratique de latin médiéval (Picard, Paris, 1968)

がある。

またロマンス諸語の母体となった俗ラテン語については、先ず Que-sais-je? 双書中の

Jozsef HERMAN: Le latin vulgaire (P.U.F. Paris, 1968)

を読むべきであろう。身につけるべき基礎的な知識が要領よくまとめられている。(邦訳が白水社から出ている。新村猛・国原吉之助訳: 「俗ラテン語」(クセジ=文庫))

それから、有名な C. H. Grandgent の An Introduction to Vulgar Latin を読むのも良いが、もっと新しい V. Väänänen の Introduction au latin vulgaire (Klincksieck, Paris, 1963 2e éd. augmentée) の方をおすすめしたい。

次に、中世の直接資料に当るためには、古文書学についてある程度の知識を身につけておく必要が

ある。ところが、古文書学の入門書として手ごろのものが最近までなく、筆者も困ったものである。留学時代バリのEcole des Chartesで聴講させてもらってやっと手写本のévolutionなどを知るのがせいぜいであった。そこで先生が紹介してくれる参考書も古くて、店頭ですぐ入手できるものではなかった。だから、最近、

Jacques STIENNON: Paléographie du Moyen Age (Armand Colin, Paris, 1973)

が出たことは大変よろこばしい。

最後に、研究上のinstrument de travailとして、数ある中から、ひとつだけ挙げておく。

W. MEYER-LÜBKE: Romanisches Etymologisches Wörterbuch (Carl Winter Universitätsverlag, Heidelberg, 4. Auflage 1968)

初版は1935年に出了たので、その後の研究で修正しなければならない点もあるが、それらは専門の定期刊行物などの論文等で補いながら常時座右において使うべき辞典である。

最後にひとこと。言語の研究、とくに中世語の研究には、純粋に言語学的見地からのみでは不十分で、どうしても、今日では古い語感をもっていわれるphilologieの観点から研究が行われなければならないということを付け加えておきたい。筆者自身、philologiqueな観点到欠けていたために、例えばDanteの『神曲』の、一見なんでもない語句の背後にある深い意味を見すごしていたことがあとになってわかるというようなことが何度もあった。かつてphilologieが消え、文学と言語学に分化していったことをなげき、警告を発していたE. CurtiusのEuropäisches Literatur und lateinisches Mittelalter (A. Francke Bern, 1. Auflage 1948)はこのことを筆者に反省させてくれた。ヨーロッパ言語を研究する人でまた読んでおられない人にぜひ一読をすすめる。(フランス語訳、英訳、邦訳あり)